

# Eureka VI

六年制通信 No. 32 平成31年2月9日(土)号

## 悠々として急げ

私がこの言葉を最初に知ったのは、開高健の対談集のタイトルだったからです。高校生の頃に読んだのだと思うのですが、これは面白かったなあ。中でも知る人ぞ知る糞尿博士こと中村浩との対談は抱腹絶倒、声を出して笑った記憶があります。ついでに、当然の成り行きながら、中村さんの『糞尿博士・世界漫遊記』も読むことになるわけですが、これがまたよかった。弟子入りしようかと思ったわ。クロレラで人類を救う、そのための大真面目の研究とは…。是非ご一読を。笑えるから。

さて、この「悠々として急げ」はラテン語の *Festina Lente* の訳ですが、有名すぎて、おそらく世界中に知られている言葉ではないでしょうか。早く目的地に着きたかったら、むしろゆっくり進みたまえ、くらいの意味で日本語の「急がば回れ」に当たります。警句らしい言葉で、私も好きだし、これをいつもご自分のサイン代わりに使われていた先生もいらっしやいました。

私はこの言葉を目にすると、いつも現代の、何事によらずどんどん細分化されていく風潮に警鐘を鳴らされている気がします。専門家と言えは聞こえはいいのですが、その専門とする範囲があまりにも狭い、どんどん狭くなっていく、そんな気がするのです。医学でも、例えば関節の専門家というのは既にあるのかもしれませんが、肘の専門家、手首の専門家、指の専門家、人差し指の専門家、親指の第一関節の専門家…、そんなふうになっていくのではないかと。俺は小指の第二関節の専門家だからその他のことは知らん、こういう専門家ばかりになったら SF ですよ。この細分化に向かう流れは、知識において、知らなくてはならないものと知る必要のないものに分ける考えにつながると私は考えます。よくないことだと思います。知らなくてはならないものだけを勉強するということは、目的地に向かう最短距離を脇目も振らずに突き進む感じがします。「悠々として急げ」とは違いますね。そもそも必要か必要でないかという判断は知識に対して傲慢だと思いますし、私は「今」の判断は必ず変わると考えているので、この勉強は自分には必要ないなどと簡単に考えてはいけないと思います。特に、若い君たちに勉強する必要のないものなどありません。以前、無用の用という言葉を紹介したでしょ。今、例えば大学入試のためだけの勉強を、君たちは学校でしているわけではありません。嫌々取り組んでいる教科もあることでしょう。入試科目だけを勉強すればいいと思うかもしれませんが。しかし、そういう最短距離を目指そうとする考えは危険だと、「悠々として急げ」は教えているのではないのでしょうか。やがて、どの教科ももっと勉強しておけばよかったと思う日が来ることでしょう。

アリストテレスが「教育の根は苦いが、その実は甘い」（英語では **The roots of education are bitter, but the fruit is sweet.** ですね）と言っています。甘い実を味わうまでの苦労はあって当然です。今は嫌だと思ふ勉強でも、選ばずに頑張してほしいと思います。要不用を決めるべきではありません。苦しい勉強に、辛抱強く学ぶ意欲をもって取り組んでくださいね。

さて、要不用の話になると、いつも思い出す荘子の言葉があります。

「大地は果てしなく広大だが、人が利用するのは足を置くわずかな部分だけだね。けれども、足の寸法に合わせて不要な土地を削り、地の底に至るまで掘り下げていったら、人にとってその土地はやはり役に立つのだろうか」  
『荘子』雑篇「外物篇」第二十六 福永他訳

つまり、必要のないものを捨て去ったのち、針先のようになったその地点に人は安定して立っていられるのだろうか。そう荘子は言うのですね。

必要でないものは学ばなくてもいいという考え方は、こうした針先の上に立とうということと同じだと思うのです。人が安心して立つために必要なのは足の寸法だけの土地ではありません。もっともっと広大な土地が必要です。実は足に触れてさえいないその広大な土地のおかげで、私たちは豊かに生きていけるのです。私はそう考えています。学生の頃、読書指導を受けていた時に先生がこの話を何度もされました。専門以外のことにも読書を広げなさい、そういう文脈でしたがね。

### 今週のおすすめ

・ロアルド・ダール 『あなたに似た人 田村隆一訳』（ハヤカワ・ミステリ文庫）

学生時代に『推理小説の誤訳』という面白い本を読みました。その中で田村隆一の訳本がやり玉に挙がっていて「恐らく学生たちに下訳をさせていたに違いない」みたいな酷評をされていまして、それ以降どうも田村さんの訳本は怪しい気がするのですが…。でもまあ、あと書きで「ぼくの好きなダール」を書いているくらいなので、今回は安心かな。ダールは映画にもなった「チャーリーとチョコレート工場」の作者ですが、「奇妙な味の」ショートストーリーの名手として有名です。開高健が『キス・キス』を訳しているくらいです（誤訳が多いらしい…）。

この本も 15 の短編集です。中でも最初の三篇が有名ですね。よくまあこんな話を思いつくと思うのですが、その中でも「南から来た男 (Man from the South)」は一体どういった発想で生まれた話なのか見当もつきません。読者は一人の男の狂気につき合う形で物語を読み進めるのですが、最後にその男を上回る狂気が描かれて、一瞬何のことかわからなくなって、落語の「考えオチ」みたいに、しばらくしてゲツとなるのです。どうです？ 読みたくなりましたか？ この話はずいぶん評判が良くて何か賞まで獲ったらしいのですが、私は、印象に残りすぎて決して忘れないだろうとは思いますが、世間の評価は分かれるだろうと思います。きっと、他の作家からは高評価を与えられるだろうとも思います。皆さんで確かめて下さい。

BGM は back number の ヒロイン でした…。